

子ども支援・特別支援研究会について



01

趣旨

本来、学齢期の子どもは、家庭と学校と地域に居場所をもち、安全で健やかな生活を送りながら、学校で学びを深め、人との関わりを通して青年へと成長し、社会の一員になっていくものである。しかしながら、一部の子どもたちは、不登校、引きこもり、虐待やネグレクト、問題行動や非行など様々な問題に直面したり、また問題を抱え込んだりしている。子どもが孤立したり、問題が深刻化したりする前に、必要な支援、適切な支援を行うことは、子どもに関わる大人たちの重要な責務である。

子どもに関わる大人は、それぞれの職や立場からできる支援を考え実行するとともに、より適切な資源につなげて支援のネットワークを広げる営みが必要である。子どもを真ん中に置いて、関係者がそれぞれの立場でできる支援を有効に紡いでいくことが、問題解決を促進し、子どもの成長と自立につながる力になる。

そこで、このたび、こうした問題に関心を寄せる教育と福祉の関係者が発起人となって、「特別な支援を要する子どもたちへの支援」の在り方について学び合う研究会を立ち上げることにした。

現実に起きている子どもの問題を直視し、事例研究を深めることをとおして子ども支援の質を高め、支援者のスキルアップを図るとともに、支援者の考え方のよりどころとなる研究組織を目指していく。

02

世話人・協力者

【世話人】

代表・朝日滋也
諏訪 徹
竹村睦子

(東京都立大塚ろう学校統括校長)
(日本大学文理学部社会福祉学科教授)
(一般社団法人子ども・若者応援団代表理事
ソーシャルワーク事務所みらい ソーシャルワーカー)
(葛飾区・墨田区スクールソーシャルワーカー)

中島 淳

【協力者】

太田由加里
加藤憲司
草開宣晶
佐竹由利子
橋本顕嗣

(日本大学文理学部社会福祉学科教授)
(葛飾区教育委員会事務局指導室長)
(世田谷区立用賀中学校校長)
(一般社団法人東京臨床心理士会 臨床心理士)
(町田市立忠生中学校校長)

03

内容

- (1) 前回までのふりかえり
- (2) 事例検討

STEP

1

提供者から事例提供

STEP

2

事例への質問・内容の確認

STEP

3

参加者による支援に関する具体的な提案

子ども支援・特別支援研究会を立ち上げてみて

5月、7月と2回の研究会が終わりました。

学校の教員系(特別支援学校・学級の先生、特別支援教室の専門員等)と現役のスクール・ソーシャルワーカー(SSW)、学童保育や放課後子ども教室のスタッフ、行政の福祉系の方、不登校等の居場所や適応教室のスタッフなど、そして大学の先生と学生。子ども支援に関わる様々な職種の人が集まって、一つの事例を中心に、子ども理解や支援の糸口を見付けていく共同作業を進めています。

1回目は18名、2回目は20名の参加でした。レポーターが一つの事例を、簡単な事例報告シートにまとめ、3つから4つのグループに分かれ、話し合いを進めます。皆さん子どもの問題に向き合っている方、関心のある方ばかりなので、いろいろな切り口から、質問・意見が出ます。

「こんなに温かい雰囲気では支援会議が開かれたら、不登校の子どもは激減するのでは？」という発言もありました。「子どもの問題をどのように見立てるか」「それをどのような支援につなげていくか」。協議を重ね、「子ども支援の考え方のよりどころ」を積み重ねていくことを目指しています。

1回目・2回目の事例に共通することは、「解決の鍵は、子ども自身がもっていた」ことでした。子どもは、いい意味で、大人の予測を裏切ってくれます。子どもがその子のやり方で一歩を踏み出したときに、場面は大きく変わりました。2回の研究会でたくさんのことを学ぶことができました。今後は、過去の事例だけではなく「今対応に困っている事例」も検討できるようにしていきたいと考えています。

皆さん忙しく、平日の夜に集まるのは御苦労も多いようです。午後6時30分には集まれる方で活動を始め、午後7時を目途に、具体的な事例検討に入ります。遅れて来られる方にも、入りやすいような工夫をしていますので、ぜひ一度、参加してみてください。

〈世話人・代表〉 朝日 滋也